

開館5周年 取手市・藤代町合併記念企画展

大正・昭和時代の取手

— 激動の時代を生きた人びと —



藤代近江屋商店の売り出し光景(杉澤萬造氏所蔵)



津田沼鉄道連隊の利根川木橋架設作戦(佐藤宗一氏所蔵)

大正



昭和

戦時中の標語(廣瀬篤家文書)

平成17年2月22日(火)～4月22日(金) 午前10時～午後4時30分(入館は4時まで)

入館無料 休館日:月曜日(ただし3月21日は開館、翌22日が休館)

開催にあたって

平成11年9月に開館した当埋蔵文化財センターは、おかげさまで昨年9月に開館5周年を迎えることができました。これも皆様方のご理解とご支援の賜物と、厚く御礼申し上げます。また本年は、3月28日に取手市と藤代町が合併して、新生取手市が誕生する輝かしい年でもあります。

この二つの節目にあたり、今回15回目にあたる企画展は、前々回の「明治時代の取手」に引き続き、大正時代から昭和終戦時までの取手の歴史を扱います。この時代は、一時的な好景気と相次ぐ恐慌、そして第一次世界大戦から第二次世界大戦にいたる数次の戦争とその間の平和が目まぐるしく交錯した、まさに激動の時代でした。多くの人びとは平和で安定した社会の構築を望みながらも、いつしか戦争と敗戦への道を突き進んでしまった悲劇の時代ともいえましょう。

過去の私たちの先祖の、そして私たち自身の歩みを振り返る行為の中から、これからの私たちが進むべき指針が示されるといえます。すなわち歴史は単なる懐古趣味ではなく、より良い未来をやることにつながるものなのです。なによりも平和の大切さと尊さを、汲み取っていただければと存じます。

最後になりましたが、今回の記念企画展の開催にあたりまして、ご協力をたまわりました皆様には深甚なる謝意を表して、開催のあいさつとさせていただきます。

平成17年2月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

「アメリカ軍本土上陸作戦と下総地域」

講師：栗田尚弥氏 國學院大学講師

日時：3月12日(土) 午後1時30分から3時まで

公開講座

(取手市郷土史研究会と共催)

「大正時代の取手あれこれ」

講師：埋蔵文化財センター職員

日時：3月5日(土) 午後1時30分から3時まで

歴史講座

「海軍飛行船SS3号の墜落」

講師：埋蔵文化財センター職員

日時：4月9日(土) 午後1時30分から3時まで

※講演会、各講座とも会場はセンター2階講座室、定員40名、当日受付順

展示説明

2月26・27日、3月13日、4月10日 午後2時から
3月12日、4月9日 午前11時から

例 言

1. このパンフレットは、平成17年2月22日から4月22日まで開催される取手市埋蔵文化財センター開館5周年、取手市・藤代町合併記念企画展「大正・昭和時代の取手ー激動の時代を生きた人びとー」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました(敬称略)。記して深く感謝の意をあらわします。

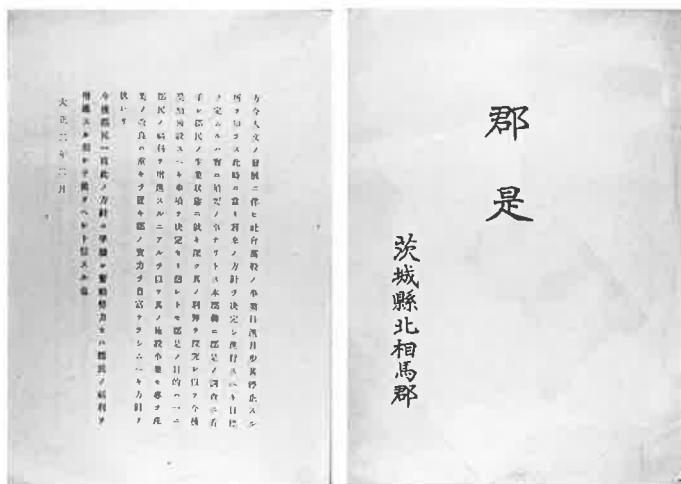
伊奈町史編纂室、関東鉄道株式会社、株式会社とこなめニューテレビ、藤代町教育委員会、陸上自衛隊輸送学校相浦秀也、故足立嘉一郎、伊奈正好、海老原千義、海老原与四郎、柿田富造、齋藤一彦、坂田要、捧潔、佐藤宗一、故嶋田若樹、菅波不可止、杉澤萬造、染野修、高木義直、高山清、武笠進、田中督人、田中亮、寺門亀曾松、寺田勝、成島光、野口幸子、林英男、平本重男、廣瀬篤、山崎英太郎、山田薫次、横瀬正太郎、吉原稔

1. 大正時代の町村

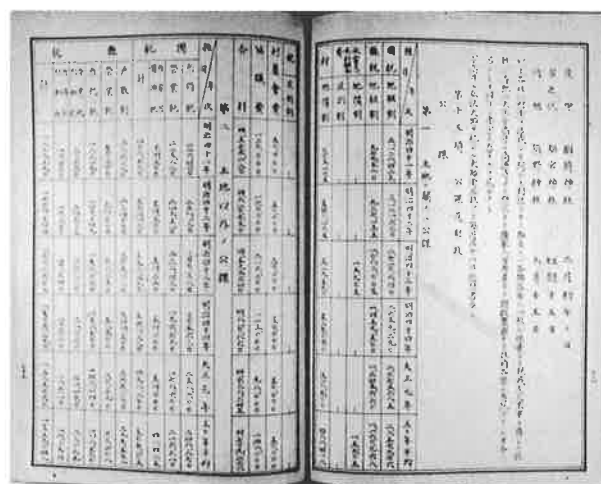
明治37年（1904）から38年にかけての日露戦争は、日本の勝利に終わったものの、8万4000人余の戦死者、14万3000人余の戦傷者と、19億8612万円余にのぼる戦費が費やされました。この戦費は増税、半強制的な国債の割り当て、外債などによって賄われましたが、人的な損失とあいまって日露戦後の国民生活を圧迫しました。明治40年から41年にかけて戦後恐慌が発生し、以後も経済活動は低迷し慢性的な不況に襲われました。

その一方で、大国ロシアに勝利して欧米列強諸国に伍して世界の一等国になったとの自負心から、やがておごりの心が生まれ、生活が華美になり消費を重んじるようになり、個人主義の風潮や社会主義の思想が広まってもきました。明治41年10月13日には戊申詔書が發布され、政府はこのような傾向に歯止めをかけようとしています。また内務省・文部省・農商務省は、町村の振興と社会秩序の強化に積極的に取り組みますが、この運動を地方改良運動といいます。

この地方改良運動において重要な役割を担ったのが、県・郡・町村の各段階で財政の確立、産業の振興、勤儉貯蓄の奨励などの方針を定めた県是・郡是・町村是の策定でした。北相馬郡では、大正2年（1913）2月に郡是が、大正5年12月には高井村村是が発刊されました。高井村村是は、地元に残されている貴重な史料です。村是に記載されているさまざまな統計の数値は一見無味乾燥ですが、ここから当時の村の状況や村民がおかれていた立場が見えてきます。最後に改良意見として、①農事を改良して収穫を増すこと、②児童・青年への教育の充実、③蚕業・養鶏・果樹の栽培などの副業の奨励、④軽薄な風紀を正すこと、⑤産業組合を設立し共同購入・共同販売・金融などを行なうこと、⑥道路を改良すること、をあげていますが、これらがどこまで実行されたかは、よくわかりません。



大正2年2月 北相馬郡郡是(取手市教育委員会所蔵)



大正5年12月 高井村村是(廣瀬篤家文書)



大正時代の取手の町並み(田中督人氏所蔵)

右の火の見やぐらがある場所が現在の商工会館、左端の洋風の建物が田丸屋呉服店です。この建物は、大正11年に建てられたので、それ以降の撮影です。



新町1丁目あたりから望んだ利根川(田中督人氏所蔵)

中央右よりの細長い建物は、内務省の河川改修のための工場です。常磐線利根川橋梁の複線化工事がはじまっているので、大正時代の中頃に撮影されたものです。

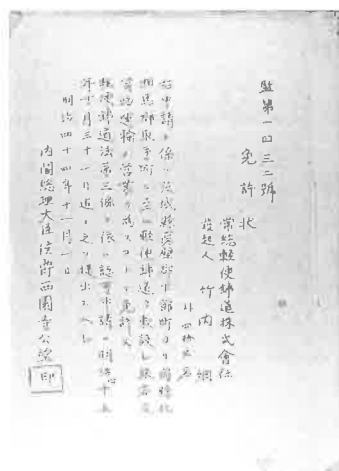
2. 常総鉄道の開業と大利根橋架設運動

明治20年代の終わりから30年代のはじめにかけて、取手と下館を結ぶ常総鉄道が計画され免許も取得しましたが、結局開業には至りませんでした。しかし明治43年（1910）8月に軽便鉄道法が施行され、局地的な小鉄道の建設に政府から補助金が交付されることになると、明治44年には沿線の人びとを中心に再び取手と下館を結ぶ鉄道建設の計画が起こります。

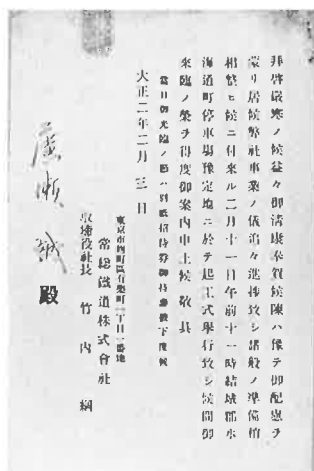
同年11月には免許を取得し、大正2年（1913）2月には水海道で起工式が挙行されました。工事は順調に進み、わずかに9か月後の11月には取手・下館間51.3キロメートルが竣工し、開業しました。以後常総鉄道は鬼怒川の水運にかわり発展をとげ、現在の関東鉄道常総線となっています。

取手で利根川に橋が架けられたのは、明治29年12月開業の日本鉄道土浦線（現JR常磐線）が最初でした。しかし道路の橋はその後にも架けられず、江戸時代と同じく渡船によって人や荷物が運ばれていました。明治時代の終わり頃から自動車が始まりますが、自動車も船に積んで利根川を渡りました。自動車の渡船には1時間半以上の時間を要し、とても不便でした。

そこで大正7年6月、取手実業相互会会頭の染野壬之助^{（いんのかすけ）}ほか126名が連印する取手・我孫子間利根川架橋の請願書が、力石雄一郎茨城県知事に提出されました。翌大正8年2月には、染野壬之助ほか248名が連印する請願書が、貴族院議長・衆議院議長・陸軍大臣・内務大臣に提出されています。この請願書では、日常の渡船による不便のほかに、大砲や装甲自動車の運搬にも支障をきたすなど、演習や有事の際の軍事輸送の困難さを強調していることに着目されます。次いで大正10年3月にも、利根川架橋の請願書が貴族院・衆議院に提出されています。こうした住民の運動にもかかわらず、利根川の道路橋の工事が始まったのは昭和3年（1928）9月、竣工は昭和5年9月のことでした。



明治44年11月1日
常総軽便鉄道株式会社免許状
(寺田勝家文書)

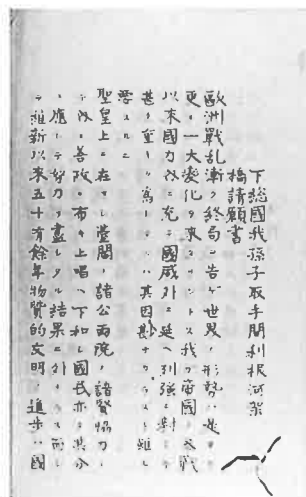


大正2年2月3日
常総鉄道株式会社起工式招待状
(廣瀬篤家文書)

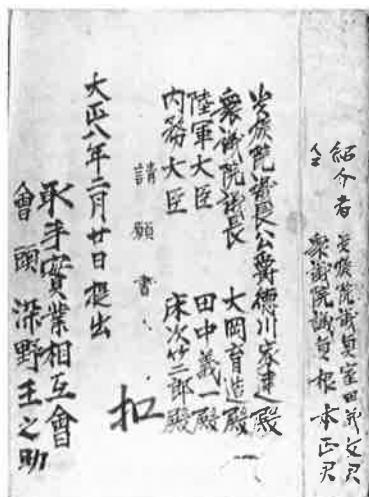


3号蒸気機関車が引く常総鉄道の貨客混合列車
(関東鉄道株式会社所蔵)

大正13年に購入した3号機関車は、アメリカのボールドウィン社製で、昭和31年に茨城交通に譲渡されるまで活躍しました。この写真は、昭和27年に寺原駅付近で撮影されました。



大正8年2月20日提出の利根川架橋請願書(染野修家文書)



工事中の大利根橋(故成島志げ氏所蔵)

3. 関東大震災と海軍飛行船SS 3号の墜落

大正12年（1923）9月1日午前11時58分、関東地方南部に大地震が発生しました。地震の規模はマグニチュード7.9、震源は相模湾西北部、地震とその後が発生した火災により東京・横浜は壊滅的な大被害を受けました。これが関東大震災です。

北相馬郡の被害は、死者1名、負傷者2名、全壊家屋8戸、半壊家屋19戸と軽微なものでした。北相馬郡役所と取手警察署は、すぐさま食料品などの救助物資の募集や輸送に取りかかります。北相馬郡からは第1回救助米2000俵が送られ、また北相馬郡青年会の有志100人は常磐線で運ばれる救援物資の配給作業のため上京しました。また取手駅には救護所が設けられ、鉄道で避難する人びとへの炊き出しや、負傷者の手当てが行なわれました。長禅寺の境内には、無料宿泊所も設置されました。

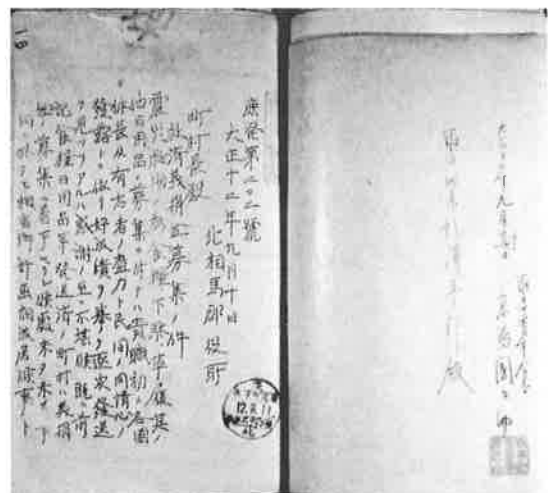
大正13年3月19日の午後12時50分頃、戸頭上空で海軍の飛行船SS 3号が爆発・墜落して、搭乗員5名（高橋道夫少佐、片桐雄司大尉、助川与四郎一等兵曹、伊奈中二等機関兵曹、高橋善三郎三等兵曹）が殉職するという事故が発生しました。飛行船SS 3号は、この日阿見村にある霞ヶ浦海軍航空隊の基地を飛び立ち、神奈川県横須賀で演習を行なったのち、帰路戸頭上空で爆発したのです。飛行船が墜落すると、すぐさま付近の住民がかけつけ消火に努めるとともに、搭乗員を救出しようとしましたが、搭乗員5名はすでに殉職を遂げていました。

翌3月20日以降、事故現場は見物の人がひきもきらず、お賽銭をあげて殉職搭乗員の霊をなぐさめました。3月25日にはおよそ1000人が参集して盛大な追悼会が開催され、4月15日にも戸頭青年会の主催と思われる追悼会が開かれました。また殉難慰霊碑の建立運動が起こり、多くの人びとの浄財により大正14年3月19日に碑が建立されました。

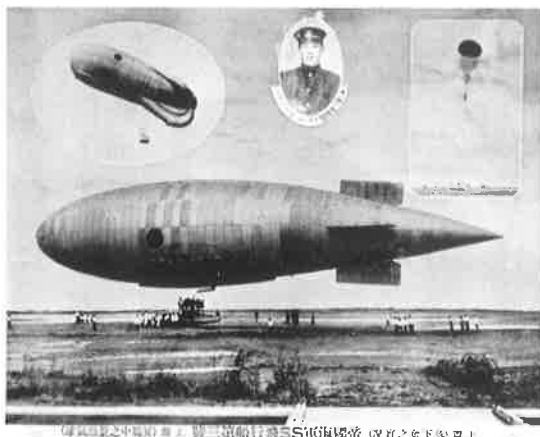


関東大震災による万世橋駅付近の惨状(取手市教育委員会所蔵)

現在の神田須田町のあたりです。右側のレンガの建物は万世橋駅で、今は交通博物館のあるところ。中央やや左よりは、日露戦争で戦死して軍神と称された広瀬武夫海軍中佐の銅像です。



大正12年 震災救助関係書類綴り(取手市教育委員会所蔵)
関東大震災後の北相馬郡町村の救助活動を具体的に知ることができる貴重な史料です。

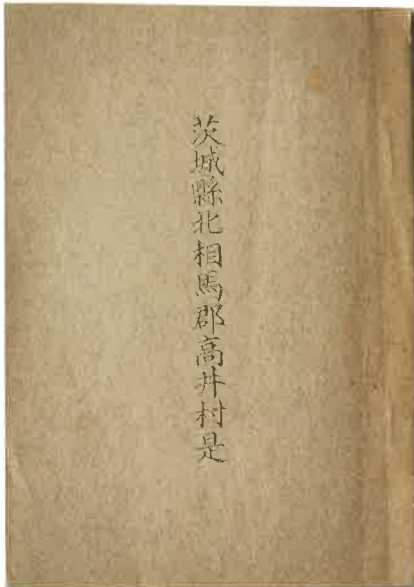


海軍飛行船SS 3号(伊奈正好氏所蔵)

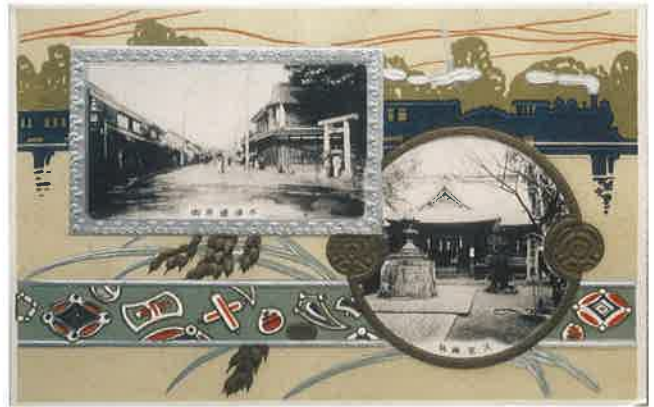
中央上は、殉職された伊奈中二等機関兵曹の遺影です。



大正13年3月に戸頭の永蔵寺で営まれた殉職搭乗員の追悼会(横瀬正太郎氏所蔵)



大正 5 年 12 月 高井村村是 (廣瀬篤家文書)



(大正 2 年) 常総鉄道開業記念絵はがき (3 点とも齋藤一彦氏所蔵)



大正 13 年 4 月 1 日 飛行船 SS3 号墜落救助につき横須賀鎮守府司令長官礼状 (廣瀬篤家文書)



大正 15 年 8 月 15 日 常総鉄道沿線案内 (取手市教育委員会所蔵)



昭和3年9月 利根川架橋起工式の記念品の扇子(取手市教育委員会所蔵)
絵と文字は、河童の絵で有名な小川芋銭の筆になります。



出征にあたっての日の丸への寄せ書き(故足立嘉一郎氏所蔵)



昭和16年1月1日 大東亜共栄圏地図(廣瀬篤家文書)



昭和13年 国民精神総動員国防大博覧会全景(故野口多蔵家文書)



昭和15年4月 靖国之絵巻(靖国神社に参拝する戦死者の遺児、取手市教育委員会所蔵)
戦争の長期化にともない、戦死者の数も増加しました。国民の戦意を高揚し、戦争に協力させるためのさまざまな運動が行なわれ、このような刊行物が出されました。



昭和18年7月1日 主婦之友7月号 家庭防空必勝号(取手市教育委員会所蔵)

一〇〇式鉄道牽引車第三属品箱
(取手市教育委員会所蔵)
鉄道連隊は終戦後の撤退にあたり、持ち込んだ資材を取手町に寄贈しました。この部品箱は、戦後元宿地区で八坂神社の祭礼ののぼりを入れるのに使われていました。鉄道連隊にかかわるものとしては、取手に残る唯一の品です。



4. 疲弊する町村

明治37年（1904）から38年にかけての日露戦争の後、日本経済は慢性的な不況におちいります。第一次世界大戦による好景気もつかの間に、大正9年（1920）には戦後恐慌に見舞われ、さらに関東大震災後の震災恐慌が追い討ちをかけます。昭和2年（1927）には、台湾銀行の不良貸付け問題から全国の銀行で取付け騒動（預金者がいっせいに貯金を解約して引き出そうとすること）が起こり、多くの銀行や企業が倒産しました（金融恐慌）。さらに昭和4年10月には、アメリカのニューヨーク株式市場での株価の大暴落から史上空前の世界大恐慌となり、日本経済も大打撃を受けました。

農村は、農産物価格の暴落と都市失業者の還流によって深刻な打撃を受けます。昭和7年の全国農村の負債総額は60億円、1戸あたり平均900円にもものぼっています。そこで同年から、内務省や農林省により農山漁村経済更生運動が進められます。同年11月以降、農林省、道府県、町村に経済更生委員会が設置され、経済更生基本調査や経済更生計画が策定されることになりました。茨城県では、昭和13年までに176町村が経済更生計画町村に指定されています。

その一つの高井村では、昭和10年10月に経済更生基本調査書が、翌11年4月に経済更生計画書が策定されています。経済更生基本調査書に記載されたさまざまな統計数値から、高井村における昭和恐慌の深刻な影響がうかがえます。しかしその対応策は、農業生産額の増加と生産費の軽減による販売価格の向上、消費の節約、勤労愛好の精神の向上といったもので、具体性よりも精神面を重んじるものでした。町村の経済更生事業へは、道府県をとおして国から助成金が交付されましたが、その額はきわめて小額でした。さらに茨城県では連年の洪水や干ばつなどの自然災害により、経済更生に向けた農民の努力にもかかわらず、主要農産物の収穫高は以後も大幅な減少を続けたのです。

昭和10年10月 高井村経済更生基本調査書(廣瀬篤家文書)

昭和11年4月 高井村経済更生計画書(廣瀬篤家文書)

昭和13年12月 高井村村勢要覧(廣瀬篤家文書)

昭和16年4月 高井村村政概況(廣瀬篤家文書)

5. 戦争への道

不況にあえぐ日本は、日清・日露戦争によって獲得した満州（中国の東北部の呼び名、現在の中国ではこの名称は使われていません）での利権をさらに拡大しようとしてきました。日本本土の2倍以上の面積を有し、豊富な資源に恵まれた満州は、当時の日本には魅力的な場所でした。昭和6年（1931）9月には、満州事変がおこります。関東軍（南満州鉄道沿線と遼東半島の日本租借地の守備のために置かれた日本陸軍）は、日本政府の不拡大方針を無視してたちまち満州全域を制圧しました。また上海でも翌昭和7年1月、中国軍と戦闘に入り、欧米列強諸国の目を満州からそらしました（上海事変）。満州事変も上海事変も、現在では日本軍の謀略とされています。3月には、関東軍は清朝最後の皇帝溥儀を執政（元首）にすえ、満州国を独立させました（昭和9年3月に帝政移行）。国際連盟は、イギリスのリットン卿を団長とする調査団を派遣します。リットン調査団の報告は、日本の軍事行動を自衛とは認めませんでしたが、満州での日本の特殊事情を認め、自治的政府の樹立を提案するという好意的なものでした。しかし日本はこれを承服せず、翌昭和8年2月に国際連盟の総会でリットン報告書にもとづく勧告が可決されると、松岡洋右代表は議場から退場、3月には国際連盟を脱会します。

また国内でも、昭和7年5月15日に海軍の青年将校が犬養毅首相を暗殺し（五・一五事件）政党内閣が終わり、昭和11年2月26日には陸軍の青年将校が武装蜂起し齊藤実内大臣、高橋是清大蔵大臣らを殺害、国会議事堂や首相官邸、陸軍省一帯を占領する事件（二・二六事件）がおこり、軍部の政治への介入が増大しました。昭和12年7月には、北京郊外の盧溝橋で日中両軍が衝突し（真相はいまだに不明です）、ついに日中両国は全面戦争に突入しました。中国との戦争で、日米関係は悪化します。満州事変以前の状態に戻すことを主張するアメリカとの交渉は行き詰まり、昭和16年12月にはアメリカ・イギリスはじめ連合軍諸国と開戦、やがて日本は敗戦への道をひた走ることになります。



康德11年6月24日 満州国定期預金証書（取手市教育委員会所蔵）
 康德は満州国の年号で、康德11年は1944年、昭和19年にあたります。



昭和11年10月 二・二六事件画報（個人蔵）



日本海軍航空隊の奇襲を受けるハワイ真珠湾のアメリカ太平洋艦隊（個人蔵）
 魚雷が命中して水柱が立っています。また水柱の近くを日本の飛行機が飛んでいるのがわかります。



昭和19年12月8日 週報 大東亜戦争三周年特輯
 開戦三年大東亜の相貌（取手市教育委員会所蔵）



6. 戦時下の暮らし

日中戦争のはじまりと激化は、国民の生活にも影響をおよぼしてきました。働き盛りの男子は次つぎに出征し、「祝出征」ののぼりをたてて町や村の人びとが総出で見送る出征光景が、取手でも日常的に見られました。人びとは出征する兵士の無事と戦勝を祈り、戦時体制に組み込まれてゆきました。昭和12年（1937）から国民精神総動員運動が展開され、消費節約・貯蓄奨励・勤労奉仕・生活改善などが強要されました。おかずは梅干一つの日の丸弁当が強制され、「パーマメントはやめましょう」・「ぜいたくは敵だ」といったスローガンが叫ばれ始めたのも、この頃です。

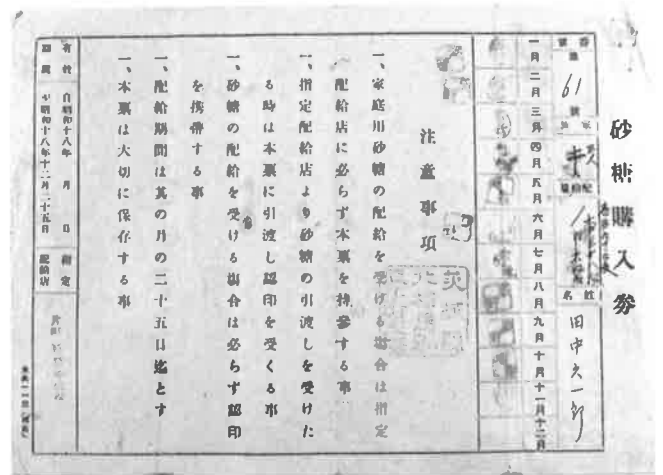
昭和13年には国家総動員法が成立し、政府は経済面をはじめ国民生活のすべての部門を戦時動員の名のもとに統制できる権限を有しました。重要な物資はすべて軍事最優先に振り向けられ、国民は耐乏生活を強いられます。食料や衣料も配給制となり、日本の経済状態はますます悪化しました。

さて第一次世界大戦中からの航空機の発達、国内への航空機による攻撃への対処を必然化しました。事実日本の航空機が中国の都市を爆撃し、多くの市民（非戦闘員）が犠牲となっています。昭和8年には、東京・千葉・埼玉・茨城・神奈川の1府4県で第1回関東防空大演習が実施されました。昭和12年には防空法が公布され、空襲に対する備えがいよいよ本格化します。昭和19年にグアム・サイパン島が陥落すると、日本はアメリカ軍のB29重爆撃機の空襲を受けることになります。

昭和20年3月10日の東京大空襲の日の午前2時頃、日本軍の高射砲、または戦闘機により現在の伊奈町狸穴にB29が墜落しました。当時消防団副団長で現場に駆けつけた富山榮氏は、水海道中学を卒業し英語が理解できたため、生存した3名のアメリカ兵を、興奮して危害を加えようとした群衆から守りました。また戦死した9名の搭乗員は、村民により丁重に葬られました。



出征光景(高山清氏所蔵)



昭和18年 砂糖購入券(田中亮家文書)



防空演習
(成島志げ氏所蔵)
バケツリレーで消火する訓練も、実際の空襲で雨のように降り注ぐ爆弾や焼夷弾の前には、まったく無力でした。



昭和20年3月10日に伊奈町狸穴に墜落したB29の尾翼部分(林英男氏所蔵)
林氏は、当時海軍中尉で谷田部海軍航空隊に所属していました。撃墜されたB29の写真は大変にめずらしく、林氏の撮影したこの写真は貴重な史料です。

7. 鉄道連隊の利根川木橋架設作戦

昭和20年（1945）の6月頃から8月の終戦時まで、千葉県津田沼にあった陸軍鉄道第17連隊の一個中隊が取手に駐屯して、利根川に木橋を架ける作戦に従事しました。これは本土決戦を控え、大利根橋や常磐線の鉄橋が爆撃で破壊された場合でも、日本軍の兵員や物資の移動をなんとか行なおうとした作戦と考えられます。また我孫子側からも同様の作業が進められたとのことですが、取手側以上に詳しいことはわかりません。

すでに同年の5月以降、取手には道路・鉄道の鉄橋をアメリカ軍の爆撃から守るための高射砲部隊と照空隊（夜間にサーチライトで敵機を照らす部隊）が配備されていました。結局この木橋は完成せず、川の中に橋脚を1本打ち込んだところで終戦となり、8月20日頃には津田沼に撤退しました。

作業には近隣の町村から勤労奉仕隊が出て、鉄道連隊の将兵と共に作業にあたったそうです。勤労奉仕隊は毎日100人位ずつ動員され、その約7割は女性だったとのこと。近隣の町村から交代で出てくるらしく、1週間位すると同じ顔ぶれになったそうです。牛久から臨時列車に乗り取手に来て、作業に従事したとの証言もあります。奇跡的に残された写真から判断すると、作業は取手駅の北側の高台の土を削り、この土を南側の利根川の堤防の方に運ぶことから始められました。

一方アメリカ軍は、主力部隊を相模湾に上陸させ首都東京を制圧しようとするコロネット作戦を計画していましたが、この中で取手はCRITICAL AREAS（重要地域）とされていました。アメリカ軍にとって、利根川の道路・鉄道の二つの鉄橋は、日本軍の兵員・物資の移動を遮断するため重要視されていたのです。戦争がもう少し長引けば、利根川の鉄橋や取手の町も爆撃を受けたかも知れません。



津田沼鉄道連隊の集合写真(坂田要氏所蔵)
中隊のうちの一個小隊の集合写真と推察されます。利根川の堤防で撮影されています。



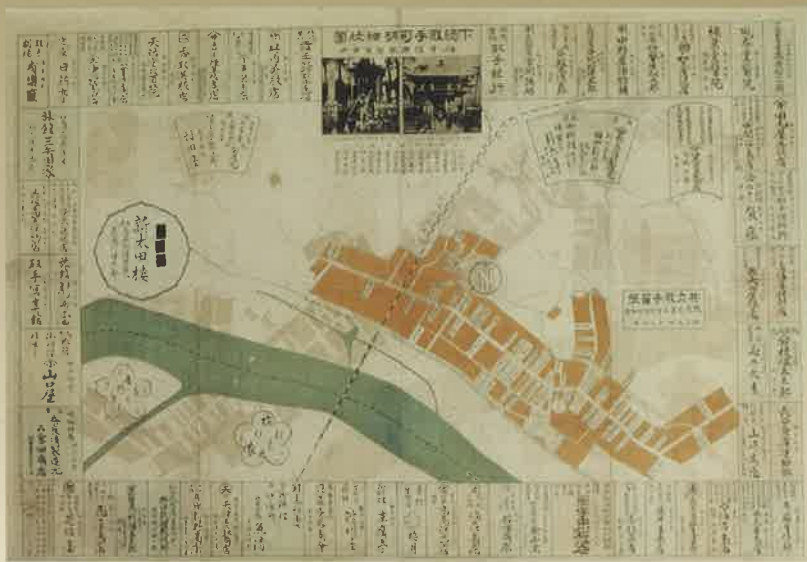
鉄道連隊の作業光景①(佐藤宗一氏所蔵)
取手駅の北側の台地を削った土をトロッコに積み、さらに貨車に積み替えています。軍人のほかに勤労奉仕隊の人も働いています。女性の姿もかなり見られます。



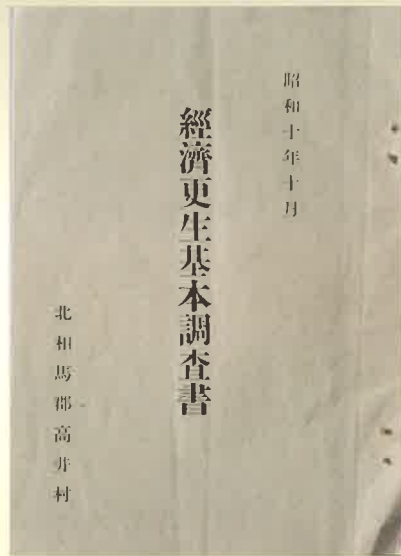
鉄道連隊の作業光景②(佐藤宗一氏所蔵)
利根川寄りに貨車で運んだ土をまたトロッコに積み替えて、堤防に沿って土を積み上げています。木橋は、常磐線の鉄橋の下流側に作るように計画されていたようです。



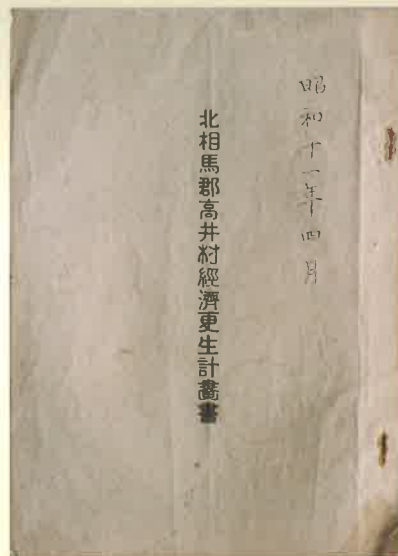
鉄道連隊の作業光景③(佐藤宗一氏所蔵)
架設の木橋を延ばしながら、堤防に沿って土を積み上げていくようすがわかります。



大正6年10月31日 下総取手町明細地図 确实信用家営業案内(海老原与四郎氏所蔵)



昭和10年10月
高井村経済更生基本調査書(廣瀬篤家文書)



昭和11年4月
高井村経済更生計画書(廣瀬篤家文書)



昭和13年1月1日 取手町商店案内 福德円満寿呉録(取手市教育委員会所蔵)
「祝皇軍出征」、「祈武運長久」の文字からは、優雅な名称とは裏腹に人びとの生活の中に戦争の暗い影が忍び寄っていることがうかがえます。

取手市埋蔵文化財センター 開館5周年 取手市・藤代町合併記念企画展
大正・昭和時代の取手 — 激動の時代を生きた人びと —
 平成17年2月22日～4月22日

編集／発行 取手市埋蔵文化財センター 制作／印刷 (有)トヨプリントサービス